

Voice of Design

Vol. 13-1

日本デザイン機構
Japan Institute of Design

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156
http://www.voice-of-design.com E-mail:info@voice-of-design.com



特集

マイナスのデザイン 5 公共の美学 —パブリックデザインマネジメント

JDフォーラム詳報

期日：2007年6月22日(金)

会場：日仏会館(東京・恵比寿)



竣工後の広場をめぐる市民による反対集会が行なわれた。(ミラノ、イタリア/p.13)
Rally of citizens against the plaza after its construction (Milan, Italy / p.13)

特集 マイナスのデザイン 5
公共の美学
—パブリックデザインマネジメント

目次

講演	2
公共性とその美学	小林正弥
パネルディスカッション	9
パネリストから	
景観が規範になるとき	佐々木歳郎
東京に未来はあるか	車戸城二
デザインの質的評価を考える	田中一雄
意識喚起からはじまるまちづくり	韓亜由美
討論	14
公共の美学	
編集後記	20

Special Issue : MINUS DESIGN 5
Public Aesthetics – Public Design Management

JD FORUM (Time : June 22, 2007 Fri Venue : Maison Franco – Japonaise Hall / Tokyo)

Contents

Keynote Lecture	2
Public Philosophy and its Aesthetics	Masaya KOBAYASHI
Panel Discussion	9
From Panelists	
When Landscapes Become A Norm	Toshio SASAKI
Does Tokyo have a future?	George KURUMADO
Evaluating Design Quality	Kazuo TANAKA
Urban Development begins with citizens' consciousness building	Ayumi HAN
Discussion	14
Public Aesthetics	
Editor's Note	20

講演 公共性とその美学

小林正弥 千葉大学大学院人文社会科学部研究科教授

公共性について

公共哲学の目的は私たちが理想と考える公共性を実現することです。これが、特に日本における公共哲学プロジェクトの重要な軸になります。公共哲学共同研究会(将来世代国際財団主催)でも、公共性という概念の意味、あるいは公と私の関係について議論することから出発しました。日本・ヨーロッパ・中国・イスラーム各文明における概念の比較研究から出発をして、哲学的にも考察したわけです。実際は文明、時代そして思想の傾向によって公共性の中身は多様で、それらを広く見ながら「今日求められる公共性とはなにか」について研究をしています。

公共哲学あるいは公共性の研究が今日求められる所以は、日本における重要な社会的・政治的な事件は公共性を軸に回っているためです。現在非常に重要な政治的議論が進行中の憲法問題にも、「公益及び公の秩序」という概念が自民党新憲法草案において人権制限の概念として入っていますし、改定された教育基本法では「公共の精神」という言葉が入っています。また、スポーツやメディアや企業などでも問題が生じると、公共性が問われます。そこで、「公共性をどのように学問的にとらえ、考え方を打ち出していくか」が

重要なのです。

海外においても、パブリック・フィロソフィーという概念は使われています。フィロソフィーそのものは「愛知の学」、知を求める学という原義で、人々の考え方、人生や世界についての思想を広く意味する概念です。それがパブリックであるということは、「公開され多くの人々に広く知られて共有されているゆえに、社会・政治を変えていく原理になる」ということを意味し、人々に広く知られて行動の指針になる哲学を意味します。アメリカにおいてパブリック・フィロソフィーといえ、たとえば大統領の就任演説において政権のパブリック・フィロソフィーが現れるといわれます。もちろん政権ごとに中身は多様ですから、パブリック・フィロソフィーはひとつに決められたものではなく、きわめて多様な形態があります。パブリック・フィロソフィーのあるべき姿をめぐって、たとえば政権が変わったり、大きな政治の流れが起こったりするのです。

そういう大きな問題を考えるのがパブリック・フィロソフィーの重要な役割です。非常に広い視野が必要になります。専門的な観点からだけだと、どうしても狭い分野の小さな論点についてしか議論ができなくなる。それを超えて学際的な研究をし、実践的な解決への提案をするのが公共哲学の役割です。今日のきわめて深刻な環境問題、あるいは平和や戦争の問題、そして貧困の問題等々が公共哲学の最重要課題であり、これらに関して私たちは考察をしています。

リベラルな公共性、コミュニカルな公共性

ここ20年ぐらい新国家主義の潮流が生まれ、それは政治にも大きな影響を与えている。こういうネオ・ナショナリズムの思想は、「日本社会は市民を強調するようになっているが、これは私のことしか考えない『私の民』、私民である」と批判をして、「公」が大事であると主張している。その「公」とは国家であり、「国家のために死ぬ覚悟が求められる」と主張し、教科書問題を提起したり、憲法の改定を主張したりしている。これが今日の政治の最重要論点になっていることは、みなさんもご存知のことと思います。

私と公の関係が、思想的にも政治的にも今強く問われている。これに対して私たち公共哲学のプロジェクトでは、従来の私と公の二元論ではなくて、それを超えた三元論的なアプローチを提案しています。私と公の二元論的なアプローチはヨーロッパでも近代において非常に重要でありまして、「公すなわち政府・国家」が私の世界に干渉することに反対をして「私」の領域を守るリベラルな発想があり、私と公を截然と区分するわけです。これに対して私たちは、「私と公の対立を媒介する新しい発想として「公共」という概念を考えたらどうか」と提案しています。日本で「公(おおやけ)」という概念は、もとは地方の首長を意味し、そして天皇制や公家=貴族、あるいはご公儀=幕府を意味するように展開したので、今日でも「公」という言葉には政府や国家という意味が非常に強い。これに対して、海外でパ

Keynote Lecture –Public Philosophy and its Aesthetics

The purpose of studying public philosophy is to realize public realms in as we consider ideal. The reason for the study on public philosophy or public realms is that important political and social issues in Japan, including the proposed revision of the Constitution, are revolving around public realms. We need to academically redefine public realms with contemporary meaning.

We need to refer to the meaning of "public philosophy" as defined in the west. Philosophy itself is a discipline of learning to love reason and to seek knowledge, and it represents a concept covering the ways of thinking, thoughts on life, and major ideologies of the world. When philosophy is "public," which is open, known and shared by many people, it means a philosophy that forms the guiding principle of people's behavior that can become a principle so powerful as to change a political regime. Public philosophy is an

interdisciplinary academic sector. The serious issues in the contemporary world such as the environment, peace and war, and poverty are problems with the highest priority in public philosophy, and we are focusing on these problems.

Today, the relation between private persons and a government (state) is being questioned from ideological and political perspectives. Our public philosophy project is advocating a ternary approach in place of the traditional binary "government" and "private" division. The binary approach is very important in modern Europe. There is a liberal ideology in which individuals insist on the protection of their spheres opposing intervention from the state or government. It clearly distinguishes the spheres of the government and individuals.

We are proposing a new sphere of "public realms" between the government and individuals. "Public realms" intermediate the opposing elements of the government and individuals. Within public

ブリックというときには、あるコミュニティに属する人々全体に関わるものを指す意味が強い。日本にその意味も入っているけれども、「公すなわち政府・国家」という意味合いが強いのでそれと分けて考えるために、「公」と「公共」という（普通は一緒に使われる）概念を使い分けたりどうか、と提起をしている。

この場合の公共は「公+共」ですから、「人々が共に考え、共に行動する」という意味になり、「民(たみ)の公共」と東京大学の山脇直司先生は表現しておられます。公が主として国家や政府をあらわすのに対し、公共とは、人々や民の立場から公共性を考えることを意味し、その公共が新しい時代にとってきわめて重要であり、「私」と「公」の対立関係を媒介するものと考えているのです。

さらにその公共の中身を考えると、リベラルな思想と(コミュニタリアンが言うような)コミュニカルな思想という大きな対立があります。リベラルな人たちは、公共を、たとえば情報公開のような公開性という意味に捉えます。これももちろん重要であり、「これまで国家あるいは政府が独占をして人々に知らせなかったものを公開して、パブリックな、つまり人々からアプローチできて意見が言えるものにする」ということであり、これが今日あらためて浮上しているひとつの公共性の概念です。もうひとつの考え方として、「コミュニティというように、個人を超えた共同体、あるいはなんらかの集団が必要であり重要である」と考える人々は、

公共性という概念を、「ただ公開するだけではなく、コミュニティやその人々の多くにかかわる共通のなにかをさす」と考えるのです。哲学的にはそれを「共通善」とか「公共善」と呼びます。前者のリベラルな観点は個人や部分や尊厳を強調する。他方、コミュニカルな観点はコミュニティの全体性を強調する。私はこの双方の観点から共に公共性を考えることが必要だ、と考えております。

活私開公

次に「活私開公」は、韓国からいらっしゃった金泰昌(キム・テイチャン)先生が中心になって提案した概念です。戦前の「滅私奉公」が戦後逆に、社会学者の日高六郎先生がいう「滅公奉私」、私だけあって公なくなる状態になった。これがネオ・ナショナリズムの台頭の背景にある、と私は考えています。そういった2つの対立関係を超越するために、私を減し捨ててしまうのではなくて、私・個人・己を活かし、活かした私を公共性に向けて開いて、公共性のために考え実現することです。最近の言葉では「個人々のエンパワーメント」に近い。具体的には例えば阪神大震災以来注目されているNPOやNGOのように、自発的活動を通して新しい社会をつくっていかうとする動きとしても現れています。これらは、NON PROFIT、NON GOVERNMENTAL、非営利、非政府という意味であり、ポジティブに言えば「公共民の組織」だと思いますので、公共的な目的を目指す自発的な組織という意

味になるわけです。これを今日の私たちの公共哲学では強く重視しています。

公共性を考える上で、今日のテーマにもつながる、空間が特に重要です。私たちはそれを公共空間とか公共圏と呼んでいて、これは近代ヨーロッパを実現していくうえで重要な役割を果たしています。そこで、空間的な観点から公共性をとらえることが有意義なのです。

空間、時間、公共

さらにこの空間的な公共性が、今日グローバル化が進行している時代に、ネイション・ステイツ、つまり国民国家の内部に閉ざされた公共性ではなくて、国境を越えた地球的な観点、あるいは地球的にして且つナショナルないしローカルな、地球域的(グローバル)な公共性を今日の時点では考える必要があります。例えば環境問題でも、地球温暖化問題などは一国の中だけでは解決できないことが明らかなので、グローバルなレベルでの公共性も考えていく必要があると思います。

もうひとつ、時間的な観点からも公共性を考えることが必要です。従来、多くの哲学的思想は、現存の生きている人々の意見、現代世代だけの公共性を考えることが多かったわけです。政治においても投票できるのは成人以上の大人ですから、当然生きた人々が投票して政治的な意思表示を行うこととなります。しかし、時間的な観点を考えた場合には、すでに死んでいる過去の世代、そして、今後生ま

realms, there are two major streams of "liberal" and "communal" ideologies. Liberalists consider "public" to mean "open to the public," most notably as "disclosure of official information." Communitarians consider a commune or other groups important, and see things that are common to the community as "public realms." In philosophical terms, this is called "common virtue" or "public virtue." Liberal points of view emphasize individuals, components and dignity, while communitarians the wholeness of a community. I believe that we need to approach public realms from these two standpoints.

Prof. Kim Tae Chang from Korea advocates to propose a concept of "Empowering the Private and Opening up the Public." In prewar Japan, "sacrificing one's personal interest for the public good" was the norm. In postwar Japan, a reactionary attitude "seeking personal interest without serving the public good" prevailed, which I consider lies behind the rise of neo-nationalism. To overcome this

conflicting relation between the two, Prof. Kim proposes that empowered individuals make use of their capabilities for the service of the public. We value this voluntary action by individuals in our public philosophy study.

In considering public realms, space is particularly important. We call it a public space or a public sphere. Since public spaces played an essential role in modern Europe, we approach public realms from a spatial point of view.

Today, when the process of globalization is in progress, a public philosophy with a global perspective that extends beyond all national borders should be considered, in other words, a public philosophy on the local and national levels that is globally applicable. For example, global warming can never be solved by one nation alone, therefore, a public philosophy common to peoples of the world should be considered.

れてくる将来の世代の両方を考えて、公共性を考える必要があるだろう。たとえば地球環境が汚染されていると、その結果がまだ生まれていない将来の世代に及ぼす深刻な被害まで考えて、公共性を考える必要があるだろう。

以上、ごく概括的ですが、私たちの公共哲学の考える公共性の基本的なイメージをお伝えしました。

公共的美学—美の三元論

「美」に対しては公共哲学の思想として多様な考え方がありうるだろうと思います。その中で私は古典的な哲学、プラトンやアリストテレスのような観点を重視する立場です。現在の哲学全体では、フランスの現代思想でいわれるポストモダンの哲学が流行していて、こういう観点と古典的な公共哲学は対立する部分があると言わざるをえない。プラトンの観点から見れば、美はイデア論の中心的な概念で、さまざまに現実に存在する多様な美的なものごとに通底する「美そのもの」がイデアの世界に存在する。「真そのもの、善そのもの、美そのものが、超越的なイデアの世界に存在する」というのが、プラトンの古典的な哲学の考え方です。また、新カント派的な哲学では、真、善、美という価値を非常に強調しています。このような考え方においては、美は理念であり価値であって、人々のためになる善と密接な関わりを持って貴重なものとされているわけです。私はこういう哲学の伝統も今日の公共哲学の中で活かしていくべき

だ、と思っています。

公共哲学の観点からあらためて美に関して先ほどの三元論を適用すると、「私的な美=私的美」と「公的な美=公的美」とその双方を媒介する「公共的な美=公共美」という3つになると思うのです。古典的な哲学では公共美という観点は強くいわれていないので、新しい観点かと思います。

やはり美といえば、まずは個人にとっての美から考えるべきでしょう。個人が何を美しいと感じるか。これに対し、現在、安倍首相は「美しい国、日本」と言っていますが、あれは公的な美です。国がいきなりでてくるわけですから、公共哲学ではこれは「公」です。「公的美」を強調している。

これに対して私たちの公共哲学からの観点でいえば、美は公共的な問題・関心であって、人々に共有され開かれていて、人々によって考えられ、実現されていくべきものなのです。国家が「これを美」として決めるのではなくて、人々が共に形成していく公共的な美を考えることが重要で有意義だと思うのです。

ギリシャ的な哲学では「アート」は「○術(ケー)」と表現されており、「政治術」は人々の精神に関わり、魂へのケアを行うものであるとされています。心理学者のエーリッヒ・フロムが「愛の技術(The Art of Loving)」、日本語では『愛すること』という優れた本を書いていて、こういう意味における「技術にして芸術」という考え方は公共哲学において非常に重要である、と思っています。ですから芸術

に関しても三元論でみれば、「私的芸術」と「公的芸術」と「公共的芸術」という3つが考えられる。私たちの多くがイメージする芸術は私的な芸術であり、ある画家やある作家が描き、あるいはある人の依頼に応じて創り、ある人が私的に鑑賞する。他方、国家が決めて行う芸術も歴史的にはあり、悪い例ではナチスなどもそういう公的芸術を利用した。しかし、今一番焦点を当てるべきは公共的芸術であろう。通常の芸術であっても当然人々が鑑賞する場合もあるけれども、その点をより明確に捉えて、「公共的に人々が鑑賞して人々が意見をいいながらつくりあげていく」という公共的芸術が考えられる。ヨーロッパの都市をみれば公共的な芸術が都市のいろいろなところにあることに気づくわけで、パブリック・アートという概念もあると思いますが、そういう公共的芸術に日本の人々はあまり関心を持たず、意識していないように感じる。それをあらためて重視していくことも重要ではないか。

政治的に考えてみれば、政治術そのものも、「政治家や政党がどういうふうに関わる技術を行行使するか」ということとして、広くいえばパブリック・アートと考えられる。そうすると、いわゆる芸術作品、あるいは都市空間といったパブリック・アートに加えて、政治的な技術も含んだより広い「パブリック・アート」の概念が考えられるでしょう。これは今日の主題であるパブリックデザインマネジメントにも重要ですし、政治の美的次元を

It is also important to consider public philosophy in terms of time. Traditionally, many philosophical ideologies focused on the views of contemporary people, or public philosophy of contemporary generation. But we might as well refer to the past generations and upcoming generations in our consideration of public philosophy as current environmental deterioration will surely affect coming generations.

There are diverse thoughts on beauty in public philosophy. I take the position of classical philosophy placing value on the viewpoints of Plato and Aristotle. In contemporary philosophy as a whole, postmodern philosophy as defined in French contemporary thoughts is in the main stream. It seems that postmodern and classical public philosophies have conflicting elements. In Plato's philosophy, beauty is a central concept. Beauty underlying diverse beautiful things exists in the world of idea. According to Plato, truth, good and beauty exist in the world of idea. In Kantian or New Kantian philosophies, the values

of truth, good and beauty are emphasized. Beauty is a concept as well as value, and is closely related with people as beneficial and precious elements in their life. I consider that these traditional philosophies should be applied to the public philosophy of today.

If the ternary theory is applied to beauty, there will be private beauty and governmental beauty. And in between, public beauty intermediates. As classic philosophy books hardly mention the aspect of public beauty, public beauty is a new concept.

When it comes to beauty, it usually suggests the state of individuals. We see how beautiful individual persons or things are. Present Prime Minister Abe advocates "Beautiful Country Japan" as his policy slogan. This means beauty created on the state level.

From our public philosophical point of view, beauty should be a concern of the public. The process of creating public beauty should be opened to the public and shared, and beauty should be thought about and realized by people. It is significant and important to consider

考えるのも意味があると思っています。そういうものが重視された歴史的な空間もあるのですが、今の日本がそうであるとは思えないので、そのような問題意識を高めていくこともパブリック・フィロソフィーの役割のひとつにいい、と思います。

品位と礼節の公共哲学

公共哲学の概念を本格的に初めて提起したのはアメリカの優れたジャーナリスト、ウォルター・リップマンで、1955年に『公共哲学』を書いて、公共哲学としてシヴィリティの哲学が必要である、と主張しました。シヴィリティという概念には、シヴィライゼーション、文明という意味も入り、あるいは礼節とか品位という概念も、そしてシヴィル、シヴィックというように公共という意味も入ります。リップマンはこの段階でカトリック的な思想の影響を受けており、自然法的な伝統の復興を主張しながらシヴィリティの哲学としての公共哲学を主張したのです。ですから公共哲学には品位や礼節を重視する伝統もあるのです。

また、公共哲学の中で重要なひとつの流れとして人文主義的な伝統も存在します。ギリシャ、ローマで古典的な芸術や学問があって、そこから哲学も始まるわけです。芸術、学問、そして民主主義のような政治の出発点もギリシャにあった。この流れが今日の政治に至るまでいろいろな影響を与え、その流れを重視する政治思想史のアプローチがあります。歴史的

にはもちろんルネッサンスで一度復興され、プラトンやアリストテレスの哲学が復興し、さらにそれを受けて政治思想としても、シヴィック・ヒューマニズム(公共的的人文主義)という、政治参加や自治を美德として重視する考え方が復興した。まずはヒューマニズム的な伝統が芸術や学問で復興され、それを受けて政治的にも古典的な考え方が復興したわけです。それがイギリスのピューリタン革命、アメリカの独立革命、フランス大革命に流れ込んで、今日の政治にも重要な影響を与えています。これが、いわゆるシヴィック・ヒューマニズム、つまり、共和主義(リパブリカニズム)という流れです。

私たちの公共哲学プロジェクトでは、芸術については詳しい議論はまだしていませんが、あらためて「美」を考えてみると、当然ながらこれは芸術の復興と密接な関係があり、公共的な美、あるいは公共的美学は、今日の公共哲学を考える上で大いに必要である、と気づきました。

公共空間の再興

先に話した公共的な空間は、「近代の革命において公共圏の生成が重要な役割を果たした」という意味で大事です。そのあらわれ方として重要なのは、まず人々が語り合える場、あるいは広場であるということです。ティー・ハウス、カフェそしてサロンといった語り合う場で、対話ができ、そこで対話の内容が段々と展開していく。始めは文芸作品、芸術的なものの対話、批評、議論であった。そこから対話

の場が従来と違う新しい展開を始め、対話にいろいろな人が加わって、さらに当初は議論されていなかった時事的な問題に発展していく。そうすると当時の王制や貴族制の批判になり、それが政治的な公共性の展開になり大きな出発点となって、近代革命のダイナミズムが起こった。その展開に、公共的な空間、公共圏が非常に重要な役割を果たした。

残念ながらこの公共的な空間が20世紀になって衰えたために、公共性は衰退したのです。ソ連などの共産圏の崩壊以来、あらためて市民あるいは市民社会が強調され、その中で「新しい公共空間の形成が重要である」と今、活発に議論されています。日本を考えてみても、語り合う場とか、広場が最近とみに弱っている気がします。「実際の空間をどのように形成し活発にするか」という問題は、政治的にも、あるいは人間が生きる場の問題としても強調されるべきであろうと思います。

パブリックデザイン—自然な作為

デザインという問題は哲学や公共哲学で実は相当議論をされているのです。

プラトンの場合は、アイデアを観照して、それをさまざまな作品に制作する。政治における作品は、理想国家の建設ということになります。これは、国家をデザインして制作するということになるでしょう。これに対して、今日主流となっているポスト・モダンの哲学は、古典的な発想を批判します。そういう観点からするとデザインの評判はよくない。このような考

public beauty created by people, which is not designated by the state.

It was a U.S. journalist Walter Lippmann who was the first to advocate the concept of public philosophy. In his *The Public Philosophy* (1955), he stated the need for the philosophy of civility as a component of public philosophy. Civility connotes civilization, courtesy or grace, civil and civic. Another important component of public philosophy is the Humanist tradition dating back to classics in ancient Rome and Greece. So far, our project has not examined public philosophy in terms of art. But as I consider "beauty," I realize that the study of public beauty or public aesthetics should be included when considering public philosophy.

Public spaces played an important function in the process of emergence of public realms or public spheres through political

revolutions in modern times. These spaces included places and plazas such as teahouses, cafes and salons where people gathered and talked. People met and exchanged conversations. Their topics evolved from art and literature to social and political affairs. They began criticizing the monarchy and aristocracy, which then developed into political public philosophy and the driving force to spark off revolutions. In the 20th century, public spaces have lost their function as such, and public philosophy has declined. Now that citizens and civil society are gaining importance after the collapse of the Communist states, the need for new styles of public space is strongly called for in Eastern Europe. In Japan, I have the impression that places for people to meet and debate are decreasing. Forming and actively using public spaces should be more seriously considered.

"Design" has been frequently discussed in philosophy and public philosophy. In Platonic philosophy, one contemplates ideas, and

え方によれば、「ある人がビジョンを見る、考える、そしてデザインをする」という行為が、今日の社会の混乱をもたらしているとか、あるいはナチズムのような全体主義をもたらす。このような批判がなされている。

私はそういうポスト・モダン思想に反対をしていて、その提起しているさまざまな論点を克服するのが公共哲学の役割だ、と思っているのです。そのことで2つの議論を紹介します。

ひとつは、私自身が提起している「自然的作為」という考え方です。日本の戦後における代表的な政治思想史家の丸山眞男が「自然と作為」という対概念を提起していて、自然は別の言葉で「であること」、作為は人間が「すること」と表現しています。近代は大きくは、自然＝「であること」から、作為＝「すること」に方向がかわっていく、と論じた。こういう作為への転換は、ややもすれば自然やエコロジーをないがしろにするという批判を今日受けています。そこで、私はそういう批判を意識しながら、「自然的作為」というような、自然やエコロジーと調和する作為のあり方を考えることが今後必要だろう、と考えています。したがって、作為とかデザインを否定するのではなく、それをより一層高めて、自然や公共性など、今日の必要に合うようにしていく発想が必要だ、と思っています。

2つ目は、公共哲学の観点の三元論、「私的デザイン」「公共的デザイン」「公的デザイン」です。「私的デザイン」は、もち

ろん私的な空間・領域において個々人がデザインをし、あるいはデザインを依頼することで、当然ながら今後も重要な部分ですが、問題は「公的デザイン」です。ポスト・モダン派を始めとする思想家たちは、たとえば国家が公的にデザインを決めて、大きな工事をするとか空間を建設するとか管理社会をつくるといったことを批判するのです。だから公共哲学でいう公と公共の違いは、デザインを活かすためにも非常に重要であって、「公的デザイン」ではなく「公共的デザイン」のあり方を考えることが、こういう批判を避けて新しいデザインを産み出すためにも有用だろうと思います。それを考えるためにデザインで大事なものは、公共的な決定主体と決定過程ということになる。

マネジメント、3つの位相

次にマネジメントの問題ですが、ニュー・パブリック・マネジメントという考え方が今日では大きな影響を与えています。これはネオ・リベラリズムの思想的影響の下にあります。これは、国家を小さくし、なるべく効率性を追求する考え方で、従来国家がしていたことを民営化する、あるいは規制緩和をする。一種の外注のかたちで企業に競わせて発注する。このようなことが行われます。この発想は従来の国家の肥大化とか非効率な部分を治すためにはよいのですが、悪くすると、重要な公共的な事業ができなくなるとか、あるいは、コムスンを始め最近いろいろ不祥事が起きていますが、私的利益追

求がパブリックな事業に入ってしまったら、重要な事業をゆがめる危険ももたらしているのです。ですから、私はニュー・パブリック・マネジメントという概念に対して、新しい公共的な行政のあり方を考えるニュー・パブリック・アドミニストレーションが必要だ、と思っています。

本当の意味での公共のマネジメントを考えていくうえで、私(小林)が提案している三機能分析によって考えてみます。「市場(経済)とガバナンス(政治)とコミュニティ(文化)」という、この「3つの位相・機能」による考え方です。今日主流の思想の中で、現実の政治経済には、ポスト・モダン思想よりも、新自由主義、ネオ・リベラリズムがさらに大きな影響を与えています。これは市場を強く重視する考え方で、逆に言うと福祉国家の福祉は切り捨てます。この考え方が、コミュニティや人々の生き方も浸食して、現在では重大な問題になっている。政治ではサッチャーやレーガンの時代から続いていますし、日本でも中曽根政権から始まって、小泉政権が徹底的に推進した。これに対して私たちは、「市場(経済)とガバナンス(政治)とコミュニティ(文化)」という、この3つの位相・機能で考えていく必要があり、その間のバランスをとることが大事だ、と思っています。ややもすれば経済的な市場の原理が強調されて、他の部分が軽視され歪みをもたらしていると思えますので、他の2つの位相・機能を強化してバランスをとることが大事だ、と思うわけです。

デザインとの関連を考えれば、たとえ

creates his work. His political work can be building an ideal state. Postmodern philosophers mainly criticize such classical conception. They contend that the act of a person to envisage, consider and design a political system will cause social confusion, or it may bring about a form of totalitarianism such as Nazism. I am against this stance, and think that public philosophy can play due roles to overcome problems that they raise. A representative postwar political philosopher in Japan, Masao Maruyama considered "natural state of things and active act of humans" and suggested that the modernization process is a transition of the natural state of things being changed by human activities. I understand that this transition causes ecological problems, but at the same time, I am confident that there are appropriate ways for humans to act while maintaining ecological harmony. In terms of design, there are private design, public design and government design. When a government determines to design and

build a large facility, postmodernist thinkers criticize that the government is intending to build a controlled society. In order to avoid such a criticism, it is indispensable to consider "public design" and not "government-led" design.

Using the ternary theory of public philosophy, we analyze its three functions and emphasize three phases. Neo-Liberalism is exerting greater influence on actual political and economic activities. This ideology emphasizes market economy. In other words, it curtails welfare services, resulting in serious social problems affecting the living of people and communities. Thatcher and Reagan promoted neo-liberalism, and Koizumi followed their steps in Japan. We consider three phases, 1) market economy and governance, 2) community and 3) culture, and consider it important to keep a balance between these phases for public management.

ば私人とか私的企業に対するデザインの依頼は、市場的原理に基づく部分が大きいだろう。それから、行政、つまり国家や自治体によるデザインの依頼は、ガバナンスとの関係になります。これに対して、コミュニティ、あるいはそこに生きる人々との関係を考えることが、大事ではないだろうか。コミュニタリアニズムという公共哲学では、コミュニティと、そこに生きる人々が重視されます。コミュニタリアニズム思想を代表する思想家の一人、アミタイ・エツィオーニという社会学者の分かりやすい本『ネクスト』（公共哲学センター監訳、麗澤大学出版会、平成17年）では、現実の社会的な問題について書いてあります。アメリカのクリントン政権成立の段階の本です。そこに表れているコミュニタリアニズムの観点や、シヴィック・ヒューマニズムの伝統以来の共和主義的な観点（自治とか政治参加が人間にとっての美德と考える）が、3つの位相のバランスを回復するのに重要です。そういう考え方もデザインの考察に活かすのではないかと、思っています。

パブリック・デザインの要件

最後に、公共哲学の観点からパブリック・デザインについて、「どういう理想的な要件が考えられるか」を思いつくままに挙げます。みなさまが「マイナスのデザイン、プラスのデザイン」を議論されていると伺いましたが、それは私にとっては好感が持てる議論です。今日では哲学的にマイナスとかプラス、あるいは善と

か悪を議論するのは非常に難しい状況ですが、コミュニタリアニズム的な公共哲学においては、さまざまな議論を展開しながら、「公共的な善（公共善）、共通の善（共通善）を考える必要がある」ということを主張しているのです。これらの観念はヨーロッパの思想史に強力に流れていて、これらを考えることが今日でも有益であり可能である、ということです。ある意味では「マイナスのデザイン、プラスのデザイン」は、公共善や共通善と密接な関係がある概念だと思います。

今回考えた美の問題についても、公共的美＝公共美はやはり存在する。この考え方は、プラスのデザインの観念を基礎づける概念ではないか。公共美を考えてみれば、「美しい空間がどういうものであって、どのように形成されるか」ということと関連します。だから、「どうやって公共美を実現していくか」がグローバルな公共哲学の大きな課題になる。それを考えるためには決定主体が問題です。一方でデザインをする人・デザイナーがいて、他方でそれに対して意見をいう人々がいる。これらがどうか関わるか。あるいは決定過程の問題として、そのプロセスをどう公開し、人々の参加を高めていくか。一方でデザイナーの肯定的な美の感覚が必要でしょうし、他方で人々の中で公共的な美意識についての感性が必要である、と思うのです。ヨーロッパという歴史的に伝統のある空間、街並みなどでは、人々、つまりコミュニティの住民の中に景観を維持するという関心が非常に強く、景

観に不調和な家を建てようとするとうと激しい反対が起きてできないことが往々にしてあります。これに対して、日本では住宅建設では私権を過剰に重視する傾向があって、「他の人の権利については意見をいえない」という考え方が逆に強くなって、結果として全体の景観が乱れている傾向がある。これは規制の問題とも関係しますが、人々の中に公共的な美意識があまり重要視されていないことの結果だ、と思っています。「そういう美意識を持つことが、公共民としてのひとつの美德である」という意識が人々の中に広がって初めて、まちづくりなどにおいて、景観として美的な空間が可能になると思います。公共哲学の観点からは、人々にそのような意識を持つように訴えることが必要だろうと思います。

そしてコミュニティの意識において、現存の人々だけではなくて過去世代と将来世代を考え、歴史を考えることも必要でしょう。自然を考える感覚や、「公共空間になんらかの意味で我々は関わり参与している」という感覚もあってしかるべきだろう。市場経済・市場原理によってすべてが決まるのではなくて、公共空間を人々がどのように築いて建設し発展させていくか。そのなかでリップマンが言ったシヴィリティが公共的に実現をしていくことも大切です。公共美を始めとする公共的礼節も公共哲学の側から人々に訴えていく重要な問題になると思っています。

In relation to design, designs created upon personal or private corporations' requests may largely depend on market principles. Designs commissioned by the national and local governments should have relations with their governance. For public design, in public philosophy, communities and people living there are emphasized. Amitai Etzioni, a sociologist who is a representative communitarian, wrote about actual social problems in his book, *Next: the Road to the Good Society*, around the time when the Clinton Administration was taking office in the United States. He presented a communitarian viewpoint as well as a Republicans' viewpoint in the civic humanism tradition. He insisted that individual autonomy and political participation were important virtues of citizens and that they were important to recover balance. His aspect may be reflected in the act of design.

I will point out requirements for ideal public design. How can it be

realized? The essential factors are who are to make decisions and what decision-making process is to be taken. How do designers relate with people who express their views? How is the decision making process opened to invite people to participate? History, nature, civility, and public courtesy are also elements to be considered. Masaya KOBAYASHI, professor, Center for Public Philosophy, Graduate School of Social Sciences and Humanities, Chiba University

Q & A Session

SANO (Floor): Today, foreign investment funds are coming to Japan to purchase companies. They say that business corporations should work for the benefit of their stakeholders and that that is a global standard. What do you think about this?

KOBAYASHI: It is a typical American way of seeing business corporations. The Japanese traditional view on companies is quite different. We place higher priority on the awareness of employees

質疑応答

佐野(会場):今、投資ファンドなどが襲ってきていますが、彼らは、企業は株主のものという考えを持っています。これはグローバルスタンダードだと主張していますが、公共という観念から先生はどのようにお考えでしょうか。

小林:三機能分析と三位相の点から見て、「企業は株主のものである」というのは、市場のみを重視する偏った考え方です。これは、きわめてアメリカ的で、日本の伝統的な企業観とは違うわけです。日本の伝統的な企業には、経営者も含めて、企業で働く人々の意識が重視されているし、さらにコミュニティにおける企業のあり方も強調されています。三機能分析からすれば、企業の中における、市場と政治と文化、市場とガバナンスとコミュニティのバランスを考えるべきだ、ということになります。企業であるからには当然市場的な原理が、この中では最大に働き、株主を尊重する面が重要であることは否定できませんが、それだけではなく、内部のガバナンスの側面とコミュニティの側面も考える必要があります。コミュニティとは、企業を構成する人々、あるいは企業の周辺にあるコミュニティのことを指し、相互のバランスを企業内部あるいは企業と周辺の間でとることが必要です。これがバランスの回復に相当します。そして現実の企業の業績においても、「バランスに配慮した経営の方が長期的に発展する」という考え方をを出していきたいと思っています。

車戸(会場):「公」と「公共」と「私」の3つの概念があって、実はある一人の人間が幸福を希求する行為の中で、私もあり、公もあり、公共もあるのではないかと考え、あたかも対立概念のように整理すると非常にわかりやすいですね。ある一人の人間が幸福を希求しようとして3つの概念が生まれてきたと思うと、一人の人間が連続的にもっているものが、ある日突然対立概念になってしまう、そのメカニズムに興味があります。

小林:公共哲学のプロジェクトでは、幸福についても「私的幸福、公的幸福、公共的幸福」という3つの概念を考えています。三元論全体に渡って、この3つは分裂して分断されているというよりも、その相互関係、相関関係を重視する観点で議論していますので、これらは固定され、バラバラに分断しているというのではなく、「ある一人の人間、あるひとつの主体がそれらの関係をどのようにつないでいくか」という観点は大きいと重視されています。公と公共の関係も、この2つが分断されているのではなく、「公共という観点から公をどうつくるか」が大事であるわけです。「私と公共」にも同じような問題があります。三元論を中心にお話しましたが、「これは相関関係の分析のしかただ」とお考えいただきたいです。

田中(会場):先生のおっしゃる公共的な美を成立させるために、私権を制していくことは、私も必須と思っていますが、日本的なあるいはアジア的な価値観において、西洋的な合理で私権を抑制すること

を是とする文化観、哲学観のある社会と違う国家において、今後それは本当になじんでいけるだろうか。今、景観法が施行され、かなり私権を抑制する動きもありますが難しい部分がある。その辺り、今後展望されていることをお聞かせください。

小林:文化論からいえば実は、ヨーロッパの方が個が重視されて、戦後にそういう個の重視を日本が導入したわけですね。そもそも日本では「私」という一人称の主語が、公と私の「私」でもあり、そこから悪いものという意味合いをもっているわけです。また、しばしば主語が省略されるという特色もあります。だから、必ずしも「私」を重視しないのが本来の日本の文化でもあります。公共哲学は一方で、個人の尊厳を強調しつつ、他方エゴイスティックになる私の抑制をあらためて復興しようとしているわけで、ある意味ではこれはヨーロッパよりも日本の方が導入しやすい考え方であると思うのです。コミュニティにおける調和、秩序、礼節といったことは伝統的なアジアの価値観に即しています。それなのに、権利の問題、特に、財産という私権の問題では、「私」のみが突出する状況になっているのが不思議なくらいです。だから、価値観そのものからしっかり議論することによって、「財産権であっても私権の行使について公共的な観点から考えることが必要だ」という考え方を広げていって人々を啓蒙していくことにより、ある程度状況が変わると思います。今、そういう視点自体が人々にないことがそもそも問題だ、と思っています。

including managers, and the stance of corporations in the locality is also emphasized. Balance between the market, governance and community, and balance within a corporation should be taken. I would like to propose the idea that management paying consideration to the balance will achieve sustainable development. KURUMADO (Floor): Suppose one person is pursuing happiness, he may see happiness on the personal, public and state levels. At first he may vaguely consider that happiness on these levels is continuous, but all of a sudden, he may find that private happiness, public happiness and state happiness turn into conflicting concepts. I am interested in such a mechanism. KOBAYASHI: In our public philosophy project, we consider personal happiness, public happiness and state-level happiness. We don't consider that these are separate elements, but they help us clarify mutual relations and interrelations between them. It is an aide to analyze interrelations. The important point is how a person can link

relations between these levels.

TANAKA (Floor): I agree with the need to restrict personal rights for the sake of public beauty. But is it accepted in Japan with a different culture from western countries in which personal interest can be restricted rationally for the sake of public good?

KOBAYASHI: From a cultural theory point of view, western nations place priority on individuals over the government. Japan introduced individualism from the west after World War II. Traditionally in Japan, insisting on personal interest has been considered to be an unfavorable attitude. Japanese culture does not place importance on individual interest. Public philosophy attempts to suppress egoistic personal interest while emphasizing individual dignity. In a sense, therefore, the restriction of personal interest may be easily introduced into Japan. Harmony, order and courtesy within a community are the traditional values of Asia. It is strange that people do not follow this value system when it comes to property right.

パネルディスカッション

パネリストから1

景観が規範になるとき

佐々木歳郎 社団法人国土政策研究会主任研究員

景観は共有価値である

Fig.1は練馬区向山三丁目の街並みです。ご覧のようにずっと生け垣が続いています。昭和55年に地域住民の総意に基づいて「生け垣に囲まれた街並みをつくる環境宣言」をした結果、非常によい雰囲気は保たれています。地域の自主的なルールに基づいて現在の景観があるのです。

重要なことは、「景観は共有価値である」という認識を全ての人が持つことです。わが国初の景観法が施行されてから5月で丸2年になります。その間、景観行政団体となった自治体は全国で278あります。また、44の自治体が景観計画を策定していろいろな施策を進めようとしています。現実問題としては、自治体の職員も議会も、あるいは住民も、景観計画で一体なことを決めるべきなのか、よい景観というのはなんなのか、日本での歴史が浅いということもあり、試行錯誤の部分が多いのですが、この景観法の動きで意味があるとすれば、景観は共有価値なのだとすることに市民が気づききっかけになったことだと思います。

司馬遼太郎のエッセイに、「都市を形成しているものは情景と市民意識の両方からの秩序感覚である」という言葉があり

ます。まさにこれが、景観が共有価値であるという認識の中身であると思います。先ほどの小林先生のご指摘にもあったとおり、この意識がどれだけ広がっていくかが大切です。

日本橋の上の首都高を地下に埋める話も、まさに、今の時代認識として出てきているのです。それに対して新聞や市民団体から、自分たちの不始末をまた税金を使ってやり直すのかとか、景観の名を借りた利益誘導だ、などといった主張がなされていますが非常に情けない気持ちになります。なぜなら、日本人全体がその時代の認識として一旦は認めたわけですから。当時は政治家や行政だけではなく、あらゆる市民が拍手喝采をした。今やと日本人は、行き過ぎのために失ったものを思い出した。環境との共生や歴史風土、それから景観の大切さにやっと気がついた。日本人全体として過去の失敗に対して、自分自身の懐を痛めて、税金を投入し新しい時代に向かおうとすることは悪いことではないと思います。



Fig.1 生け垣が続く街並み (練馬区向山三丁目, 東京)

規範意識の変化

さて、将来に向けて日本人の規範意識としての景観価値というものに、希望が持てると思うひとつの根拠として、最近の日本人の社会規範に対する意識の変化の兆しが挙げられます。

ひとつは、違法駐車を取り締まりを民間に開放した結果、実感として道が非常にすっきりして街の眺めが変わったことに気がついた時に、日本人の規範意識に変化があった気がするのです。今までは、規制はまさに上から押し付けられるもので、誰かが決めてしょうがないから従う。ですが駐車違反に関しては、自分たちが被害者であり加害者であるという両面を持っているので、ルールは実は自分たちにとっても利益があり、守った方がよいということに気づいた大きなできごとでした。

また、現在では多くの自治体がタバコのポイ捨て禁止条例や歩行喫煙の禁止などをやっています。2005年5月のあるインターネット調査で、「不快だと感じる迷惑行為」の上位に「歩きながらの喫煙」「公共の場所での喫煙マナー」「タバコの吸い殻のポイ捨て」がありますが、この時点ではポイ捨てに関する条例はそれほどなかった。従来ですと市民の不満や、これは問題だとアンケート調査に示されてもなかなか社会は変わらない、行政も対応しないということが普通でしたが、このポイ捨てに関しては4.5年前に、一般の市民の人たちが不快だと思い始めたことが、いつのまにかごく普通のルールとして社会に広がりつつあります。日本人も、規制や

From Panelists

When Landscapes Become A Norm

* Landscape is a common asset.

The landscape law was enforced two years ago, and so far, 278 municipalities have decided to introduce landscape administration, and 44 of them are now formulating their landscape plans. The greatest development after the enforcement of the law is that people are beginning to realize that landscapes are their common assets. The government announced the idea of removing the express highway above Nihombashi Bridge in central Tokyo and rebuilding it underground. Some journalists and civil organizations complain that the government is going to use taxpayers' funds to rectify its past mistake. They say it is profit making in the name of public landscape. I feel sad to hear these opinions. Now people have come to realize the importance of the history and climate of a city and its landscape.

It is not bad for us to rectify our past mistake by investing tax money.

* Change in Norm Consciousness

There are some examples of consciousness change among Japanese people about streetscapes.

Controlling illegal roadside parking was commissioned to a private organization. As many had parked their cars on roadsides, knowing that it was illegal, they complained about more strict enforcement of traffic regulations. But after a while, people noticed that streets were cleared and traffic became smoother, and realized, "Rules are beneficial to our living, so we had better observe them."

Today, many local governments enforce ordinances to prohibit cigarette littering and smoking while walking. These ordinances were laid down reflecting citizens' voices against smoking in public and the littering of public spaces with cigarette butts. The Japanese are beginning to realize that rules and regulations are arrangements

ルールはお仕着せではなくて、自分たちの地域なり暮らしなり都市なりを快適にしていくためのお互いの約束事だと気づき始めているようです。

パブリックデザインの精神

とはいえ、マイナスのデザインの委員会で議論をしていると、この先どの様なプロセス、方法論をとれば、実際に日本の景観がもっと落ち着いたものになっていくのか、現実的には難しいという話に必ずなります。京都市が看板を規制する条例をつくりましたが、国レベルで環境共生型の環境経営の観点から景観問題についてどう考えているのか国交省にヒアリングをしました。やはり国や国会も、単なる生産設備や商品だけではなく、企業のトータルな活動での環境経営度をきちんと測定し、野放図な看板やネオンサインについても評価をする。その結果として、よい方向に働きかけていけないかと前々から勉強している、と聞きました。地球環境という基準、あるいは、日常の中での規範意識のちょっとした変化などが、いままでと違って景観問題に対する切り口として広がってきつつあるという気がします。

最後に、私は「パブリックな場所のデザイン」という意味ではなく、「パブリック精神に裏打ちされたデザイン」こそがパブリックデザインであるべきと言いたいし、そこも含めて啓蒙活動をしていきたいと考えています。

パネリストから2

東京に未来はあるか

車戸城二 建築家、竹中工務店設計部部长

東京は魅力的か？

「公共」の利益にまで目を向けないと実は「私」の利益もない。このポイントでお話をします。

今、都市に住んでいる我々は、どうしても発展と衰退に巻き込まれます。自分たちが住んでいるまちが50年後に衰退か発展か維持向上か、あるいは打ち捨てられているかもしれない、という運命があるとしたらそこからは逃れられない。

仮に現状維持でいいとしても、そのためにはある程度の投資が必要です。お金がその都市に回ってくるというのはどういことでしょうか。投資は株と同じで、将来性が見込まれないと期待できません。

都市の存在価値を、情報集積度、安全性、居住性と考えてみます。東京は世界の他の都市に比べると情報集積度と安全性は高い。さて居住性はどうか、と我々は考えてみるべきだと思います。

皆さんが外国人の投資家だとしたら、東京のどこのまちは世界の他のまちより魅力的かどうか、投資先として魅力的かということです。これが魅力的でないと、東京は外国から投資されないこととなりますから、維持発展向上が難しくなります。

要するに、魅力的であることがこれから都市が維持発展向上していくために非常に大切で、我々は否応なしに世界の他

の都市と競争させられていることを認識する必要があります。

たとえばニューヨーク、ロンドン、パリ、それにアジアのシンガポール、ソウル、上海、北京あるいはドバイ、そういった都市がプレゼンスを増してきている中で、50年後、100年後に東京は今の東京でいられるでしょうか。

経済効果と公共

「公」と「公共」と「私」というご指摘を小林先生にいただきました。我々は頭のなかに綺麗な公共空間というと「公」がつくった都市景観を期待しがちですが、我々は自分たちでつくる「公共」という領域の中で新しい美学を産んでいかなければならないと考えます。

「私」があまりにも尊重され過ぎた自由主義の中で景観は今のような姿となっています。これが投資する先として世界の都市に比べて魅力的かどうか。情報集積度と安全性がもし同じであったら、この都市に投資したくなるでしょうか。

自由主義の中ではどうしてもデザインのあらゆる提案は経済効果を狙う傾向があります。経済効果を短期的に狙うと文脈から突出させてしまう。周囲の建物と違うことをやる。目立つことで経済効果を上げようとするので、非常に短絡的に周囲の文脈を無視するか突然文脈を変えろという手法をとり、自動的にまちはガチャガチャになっていきます。

上海とかドバイのように印象的なデザインをすることで印象を上げると知名度

to make their community or city life more pleasant.

* Public Design Spirits

The Kyoto municipality enacted an ordinance to regulate signboards. The Ministry of Land and Transport has been studying ways to evaluate corporate activities not only from their production equipment and merchandise, but also from their environmental management capacity including their advertising boards and neon signs. The Ministry considers that this approach will help improve streetscapes. A little change in the norm and consciousness becomes a factor to improve landscapes.

Toshio SASAKI, Chief Research Fellow of Kokudo Seisaku Kenkyukai, President of Smart Public Inc.

Does Tokyo have a future?

* Is Tokyo enchanting?

There is no personal "benefit" without public "benefit." We live in a city inevitably, and are involved in its progress and decline.

The value of a city can be measured by information accumulation, safety and livability. Comparing with other cities, Tokyo may have higher levels of information accumulation and safety. However, what about its livability? We should consider this problem.

Suppose you are a foreign investor, do you find any place in Tokyo so enchanting that you feel like investing your money? Without charm in the city, no investment will be made from foreign investors. Without their investment, its sustainable economic development will be difficult.

* Economic Effect and Being Public

We need to create new aesthetics in the public field. In Tokyo, we have chaotic streetscapes as a result of allowing building owners to enjoy their freedom in design. If other cities have the same level of information

が上がってプレゼンスが上がるということがありますが、経済効果を狙えば回収期間も短くなる。回収が終わってしまったデザインというのはいわば残骸で、残骸がまちに溢れるという状況を産んでしまうのです。

一方で我々が自由と信じている経済は本当に自由かということがあります。その経済活動にはグローバリゼーションとあって、たとえばアメリカの会計手法を日本に入れるなど、それぞれ厳密な規則を持って経済も運営されているということも知っておく必要があります。

デザインのカデ

我々はそういった状況の中で美しい都市実現のルールを模索しなければなりません。

ここで非常に重要なのは、建築の外装デザインは実はパブリックの一部だということです。私も景観条例で規則に縛られるのは好きではありません。しかし、少なくともなんらかのルールで公共の空間を、世界的に競争力のあるレベルに引き上げなければならない状態だということは認識しないとイケない。

私はデザインを生業としていて、デザインによってこの問題を解決ができないかと考えています。ひとつ、ポジティブに考えられることは、建築的には美しいなどと思えるまち、たとえば代官山、はマイナスのデザインで指摘されるようなことは非常に起こりにくくなっています。デザイン的な質が高いとそれは皆にわか

るのです。我々にはそのトリガーを用意する能力は十分にあると考えています。

つまり、世界的な投資、すなわち都市間競争に勝ち残れば、我々のところにはお金が回ってくる。つまり、徹底的にお金儲けのことにこだわったとしても、実は我々は「公共」の領域の景観のレベルを引き上げなければならない。そうすることによってはじめて我々のところにお金がかかる、そういう認識の元に「公共」を考えていく必要があるということです。

パネリストから3

デザインの質的評価を 考える

田中一雄

環境・プロダクトデザイナー
GKデザイン機構代表取締役社長

親しまれたい公共性が都市を破壊する

私の主題は、パブリックデザインにおける質の評価を問いたいということです。それは、公私という領域の問題ではなく、官民のという主体の問題が大きく存在します。官の領域では、デザインの質的評価ができていないことが非常に問題だと思えます。

分かりやすい例をいくつかお見せします。Fig.2は幼稚園バスのシートではありません。皆さんがお乗りになっている公共交通機関の車両シートです。欧米から見ると日本は非常に子どもじみた文化の国だといわれます。それはロリコン文化とアニメカルチャーのせいだと言われたりもしますが、まさしくそうした状況が

如実に表れているのではないのでしょうか。

なぜこういうことが起こるのか。バブル期に問題視され、中川理さんがディズニールンダゼーションと名付けて本に書かれましたが、親しまれたい公共が都市を破壊するのです。つまり、行政は税金によって賄われるため、市民に親しまれなくてはいけないという強迫観念が存在し、それによって親しまれるデザインを安易に求める。その結果がキャラクターや漫画であり、「わかりやすいことはいいことだ」という結果になってしまいます。

絵を描くことが市民参加？

さらに市民参加の「あり方」という問題が存在します。一例をあげれば、ある鉄道事業者が実施した連続立体交差事業における高架駅のデザインがあります。それは対象地の自治体の主催で、地元の小中学生にデザインを公募しました。この背景には、連続立体交差事業に対する地元の反対等があります。ですからこれがガス抜きだという話は意味としては十分理解できますが、土木施設とは100年残る



Fig.2 バス車両のシートに展開されたキャラクター
Fig.2 Character on the seats of a bus

accumulation and safety, would you still dare to invest in Tokyo? Under the free economy, building owners tend to emphasize short-term economic effects. This tendency may result in designing a building different from the neighboring buildings, and eventually, the streetscape will become uncoordinated. As seen in Shanghai and Dubai, the impressions and presence of these cities are enhanced with buildings competing their unique designs. After the investment is recovered, the building of unique design will remain on the street as just a ruin. Thus, there will be streets filled with ruins.

* With Designers' Strength

We must seek to formulate rules to create beautiful streetscapes. What is important here is that the exterior designs of buildings are part of a cityscape. We should recognize the need for some kind of rules to upgrade public space designs in cities in Japan. A beautiful

section of Tokyo from an architectural viewpoint, such as Daikanyama, has few points that we want to reduce. People know places where the design quality is very high. I am confident that we are capable to trigger greater opportunities to help people admire high quality streetscapes.

George KURUMADO, architect, Director of Design Div., Takenaka Corp.

Evaluating Design Quality

* Citizen-friendly public design destroys cityscapes

The focus of my concern is the poor quality of public designs. It is a problem that the central and local governments are not concerned about the quality of designs. One example is the seat of a public transportation system (Fig. 2). Government officers feel threatened that public designs must be friendly to citizens since taxes are used for them. As a result, childish, cartoon-like characters flood public facilities and spaces.

ものですね。それをこうした非常に恣意的なデザインでつくって良いのか。単なるお絵描きコンクールではなく、これをもって実施するのです。もちろん、プロが設計することになっていますが、本当によいものができるとは限りません。民意を活かしたものであれば良いのだという行政の意識は、あまりに民に媚び過ぎてはいないでしょうか。

さらに、小学生に絵を描いてもらうことと、デザイナーや建築家に仕事を頼むことのレベル差を行政は本当に分かっているのでしょうか。ここにはクオリティや文化の評価がまったくないように思います。

市民参加でやると合意形成も図れるうえに、デザイン事務所の高いデザイン料を払う必要がない。それは、非常に優れた仕組みとして認識されているように思われる。それをええないのです。実際に今の日本の公共事業におけるデザイン業務には、こうした状況に近いものがあります。姉齒問題に象徴されるように、ダンピング競争の中でクオリティを担保できないという問題が発生しているのです。

これは市民社会が成熟しないうちに市民参加を始めてしまった日本の歪みかもしれません。フランスで行われているコンサルテーションという合意形成は、言葉を発する市民参加です。つまり、「絵を描く」ことではなく、プロがつくったものに対して徹底的に議論を尽くすことが本当の市民参画であるという考え方です。このところを行政がわかっていない。問題

はかなり大きいといわざるをえないと思います。その中で、こうした我々の活動の中で、デザインのバリューということをもう一度言っていかななくてはならないということが今日の私の主張です。

パネリストから 4

意識喚起からはじまる まちづくり

韓 亜由美

アーバンスケープ・アーキテクト
ステュディオ・ハン デザイン代表取締役

「工事中景」—まちの資源を掘り起こす

日本のまちづくりにおいて民主主義が成立しにくい。直接に利害関係がなければ、特に公共事業や大規模な開発は一方的な上位下達でことが済んでしまうことがほとんどで、市民は参加意識が希薄で「自分たちは言うべき立場ではない」と思い込まれていると思います。環境問題などにかかわる場面ではいくつか大きな市民運動が見られるようになりました。

「工事中景」とは、2011年頃からいろいろなエリアの工事現場を対象に、デザインによってその場所の個性や魅力を引き出し、工事期間中のプロセスを工事完了後の場づくりのために活用するというプロジェクトです。工事現場といってもまちを占有する貴重な時間と空間であることに変わりはなく、特に都市部においては、周りに与える負荷、障害物の度合いが大きいほど非常に価値が高い、といえます。その工事現場を市民同士、あるいは、事業者・従事者と市民を結びつける新し

いメディアとして活用しない手はないだろうという発想です。これは商業的に流用して現金収入にすぐ換えようという発想とはまったく対極で、その場所の本来持っている価値を市民に還元するためのデザインという視点で行っています。JR新宿南口の基盤整備事業の現場、日本橋地区の地下歩道工事の仮設歩道 (Fig.3) などや、直近では安藤忠雄さんが設計された東京大学大学院新校舎の建設現場を手掛けています (Fig.4)。

無関心と規格化が生み出す景観

これらを実施して感じることは、再開発によってそれぞれの場所が本来持っている歴史や個性の魅力が失われ、均質化されていく例がほとんどだということです。

現代の建築技術の進歩や工業製品の高品質化によって、建築においても建材から工法まで一定以上の品質、規格、マニュアルが共有化できるようになりました。その時のデザインの流行が全国各地どこでも再現可能になっているわけです。

多様性がこれだけ担保されているはずの現代において、建築や土木という公共的な景観を決定しライフサイクルが最も長い建造物に対しても工業製品の規格化されていく。市民にはもはや選択肢があるようでない。また、その市民が無関心であるということ、計画や設計にかかわる人間の価値観がほとんどそっぽを向いていること、双方が絡むことなくすれ違っているという状況の中から公共の景観が生み出されている、という現状も一

Another problem is the way "citizens' participation" takes place. One example is the design for elevated station buildings for a railway corporation which has reconstructed its railways on the overpass of two-level crossings. The local municipality "invited contributions for design" from elementary and junior high school children in the locality. Behind this was the opposition among citizens to the construction of the two-level crossings. Therefore, collecting designs from children was one way of calming down their complaints. Selected pictures were going to be retouched by professional designers. However, we should remember that a construction work has a long life and remains there for years. Is it right to design public facilities in such an arbitrary manner?

I also wonder whether the government understands the difference in design quality between inviting school children to paint pictures and contracting professional designers and architects. Government officers may consider this system to be an excellent way to invite to the

participation of citizens and to forge consensus, and in addition, to save an expensive design fee. The government or public design situation in Japan is actually like this. There is a problem that design quality cannot be assured in the competitive market condition. I would like to emphasize the need for us to advocate the value of design.

Kazuo TANAKA, environmental and product designer, President of GK Design Group

Urban Development begins with citizens' consciousness building.

* Construction Site Design ? Identifying the Resources of a Town
Construction site design began around 2001 at construction sites at many locations. It is intended to identify the characteristic and charm of the site through the act of designing, and to make use of the construction process as an information medium and a communication tool between the owner of the building and people. (Fig. 3 and Fig.4)



Fig.3



Fig.4

Fig.3 デザインされた覆工板と日本橋の街 (写真momoko japan)
 Fig.4 Thinking Forest
 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 福武ホール建設現場仮囲い
 情報学環・学府の学生・教員から集めた約800の研究キーワードを有機的に連携させて配置した知の森。その森の中で、学生は自分が生息するキーワードに動物のシールを、来訪者は面白そうと思うキーワードに花のシールを貼る。時間とともに森の様子がかわっていく。

方であるのではないのでしょうか。

これらの事例を通して、まちの生きた景観づくりとはそこで生活する人や集う人の意識喚起から始まるのではないかなと思いました。身近な場所に興味を持ち始めると当事者としてその場所の新たな価値を創出する契機になり、地に足のついた正しい批評眼を持ち始めると思うのです。事業者や計画者は、それを受け止めて何らかのかたちで反映する用意と覚悟が前提になってくる。その点では、事業者や計画者側の意識喚起もしていかなくはいけない。それは非常に手間がかかり、デザイナー側にも緊張感を要し、ビジョンのあるデザインの必要性というものが問われてくると思います。

民主主義とまちづくり～イタリアの事例

これは大変象徴的な例ですが、公共景観に対する民主主義が死んでいないという例を報告します。

ミラノ北部郊外のスキアヴォネ広場、ここは重工業地帯でしたが空洞化と高齢化が進み、もう一度「人の生活の場」として再生したいと、最近、ミラノ工科大学が移ってきたり、ギャラリーが少しずつ

つできたり、という場所です。

2000年に中層の共同住宅の中庭部分の広場の計画で、公開形式のプレゼンテーションが行われました。一応、合意形成の場でしたが一般の参加者はほとんどいませんでした。2001年に施工開始、2002年の冬にはほぼ施工完了、2003年春には竣工したのですが、2004年に住民の意向によって大幅な修正がなされました。最



Fig.5

Fig.5 スキアヴォネ広場 施工前は何の変哲もない芝生広場だった

出典 : http://viaggi.ciao.it/opinion_images_view.php/OpinionId/508182/img/30126より

Fig.6 施工後 左側がウエットエリア、右側がドライエリア。真ん中の壁によって広場は完全に2つに分断された。

出典 : http://viaggi.ciao.it/opinion_images_view.php/OpinionId/508182/img/30132より

Fig.3 Designed steel plate covering a roadwork site and the streets in Nihombashi

Fig.4 Thinking Forest. Temporary hoarding of the construction site of the Fukutake Hall, a new school building for Interfaculty Initiative in Information Studies, Tokyo University. Around 800 keywords relating to research were collected from professors and students and are organically linked. Students paste on animal illustration stickers, and visitors paste on flower stickers on the keywords they find interesting.

Fig.5 Piazza Schiavone, Milan before construction.

Fig.6 Piazza Schiavone, Milan after the construction. The plaza was divided into two sections by the central wall. The left side is a wet area, and the right side a dry area.



Fig.6

* Urbanscapes as a result of people's indifference and standardization

What I have realized while being involved in these projects is that the historic flavor and characteristics of locations are lost by urban redevelopment projects, and they are turned into homogeneous urban sectors. Thanks to the advancement of construction technology, and the higher quality of construction materials, similar styles are duplicated all over the country.

Today, when diversity is guaranteed in all aspects, architectural structures have become standardized as industrial products. Citizens appear to have many choices, but in fact, they have very few choices.

* Democracy and Town Development? Cases in Italy

Today's urbanscapes are created as a result of people's indifference, and the lack of reflection of the values of people concerned to the plans and designs. I would like to introduce a symbolic example that democracy is in place in the field of public cityscapes. (Fig. 5 and Fig. 6)

This is Piazza Schiavone in the northern suburbs of Milan. In 2000, a presentation on the redevelopment of this plaza was held as an open forum. It was intended to be an opportunity to forge consensus, but few citizens attended. Construction began in 2001 and was completed in the spring of 2003. But in 2004, a major re-construction was executed because of citizens'opposition to the just completed plaza.

This is a case that exemplifies people not showing any interest in the redevelopment project at the planning stage on one hand, and the municipality not really trying to forge a consensus, on the other. This kind of process is common in Japan.

For public or private projects larger than a certain scale, a policy to raise people's attention in the planning stage should be taken. Public hearings only for stakeholders or only for the sake of formality do not function well. Construction site design or workshops can be effectively used to raise people's consciousness.

Ayumi HAN, urbancape architect, President of Studio Han Design

初は、個々人が「これはおかしい！」と不平を言い合っていたのがだんだんに盛り上がり、住民たちは一致団結して「ピッコーニ、ピッコーニ(イタリア語でつるはしの意)」を合い言葉に、「つるはしを持って」「この壁を壊せ」と、この計画に特徴的な壁の他、日影の無いベンチ等すべてを撤去するよう市に迫ったらしいのです(表紙、Fig.5.6)。

これは住民がまったく興味を持たなかったことや、また行政側が合意形成に無頓着なまま、内容が問われる事無く進められた結果が顕著なことで表れてしまった例です。でもこの計画の進行過程は特別悪いものではなくて、日本ではごく普通に行われていることです。ですから住民の意識が高くなってくればこういうことは起こりうる。デザイナーとしては人ごとではなくて非常に考えさせられる部分があります。

そこに生きる人たちを主役に

ひとつの提案として、一定以上の規模がある公共事業や公的な規模の民間事業、小さくても意義や影響が大きい計画は、計画の段階で市民の意識喚起のための施策が必要だと思えます。それを義務づけて、その予算基準を国や行政が自ら定めていくのはどうだろうか。利害関係だけとか合意形成という形式のための公聴会は全く機能していません。ですから、工事中景のようにプロセスを活用したり、ワークショップもいいと思えますし、一部の建築家の方々の取り組みで市

民参加を設計に組み込む例もあります。その場所にあったコミュニティデザインで住民の意識を喚起していくことが効果的ではないだろうかと考えるわけです。手間はかかりますが、デザイナー側からも事業者側や市民側からも一緒にものをつくることに携わったという喜びを感じられ、将来にわたる関わり契機を生むというのが私の実感です。やはり人の意識を汲み取っていくことが同時に行われないと時代を生き延びるまちづくりではなく、かたちだけのものになってしまうのではないのでしょうか。

ささき・としお／1954年東京生まれ。早稲田大学法学部卒。米国大手半導体メーカー、ランド・アソシエイツ(米国ブランドマネジメント・コンサルタンシー)パートナー・コンサルタントを経て現職。専門：公共政策、CSRテクノロジー戦略。

くるまど・じょうじ／1956年東京都生まれ。1981年早稲田大学建築学科大学院修了(建設工学)。1988年カリフォルニア大学バークレー校大学院修了(建築学)。1989年コロンビア大学大学院修了(アーバンデザイン)。1981年竹中工務店入社。主な作品：北青山吉川ビル、PCP丸の内、竹中工務店東関東支店、代沢レジデンス等。主な賞歴：BCS賞、東京建築賞、東京都知事賞、グッドデザイン賞、建築学会 作品選集、JCD賞、SDA賞、北米照明学会賞入選等。

たなか・かずお／1956年生まれ。東京芸術大学美術学部デザイン科卒業、同大学院美術研究科修士課程修了。東京芸術大学非常勤講師、グッドデザイン賞審査委員、都市景観大賞審査委員。土木学会デザイン賞審査委員、技術士(建設部門)。主な受賞：SDA大賞、グッドデザイン賞賞金賞など。主なプロジェクトとして、中国北京オリンピック公園環境計画、愛・地球博サイン・ストリートファニチュア計画、ドイツベルリン市ストリートファニチュア計画、富山ライトレールトータルデザイン計画、など。

はん・あゆみ／東京新居生まれ。東京芸術大学デザイン科卒業。都市のパブリックスペースを主軸に、プロダクトから建築、土木、ハイウェイ走行空間まで、領域を超えてデザインを実践。現在、東京大学大学院情報学環学際情報学部にて知覚と環境についての研究活動も行う。1997第一回ロレアル賞 奨励賞受賞、2001.05.06グッドデザイン賞・特別賞、主な仕事に「新宿サザンビートプロジェクト」「中部縦貫道 小鳥トンネル シークエンスデザイン」「第二東名 豊田ジャンクション全体景観設計」。著書に「工事中景」。http://www.studio-han-design.com/

討論 公共の美学

景観重視になりつつある？

森口将之(コーディネータ):昨年(2006年6月18日)も「マイナスのデザイン—無自覚な醜景」というテーマでフォーラムをやったんですが、そのときに佐々木さんが紹介した数寄屋橋交差点の交番の看板。あれが最近なくなったという話を聞いたんですけど、たしかに少しずつ変わってきている感じはします。市民が声を出し始めているのでしょうか。

佐々木歳郎:昨年のフォーラムでは数寄屋橋交差点の交番の屋根の横の非常におせっかいな「もっとめだとうよ」という看板や、美観風紀地区だから看板は禁止しますという看板を紹介してみんなで笑ったんですが、なぜかその後2つとも消えているんです。さっきお話したように日本の社会の規範意識が変わりつつあることをいろいろなところで実感しています。なにを言ったって無駄だよという話ではなくて、言ったらみんなが共感してものごとが動いて一歩前に進むという時代に、実はなっているんじゃないかと。

車戸城二:建築のデザインに関して言うと、国内の建築主には「公共に受けます」という言い方が、少しずつ成り立っているかなと思います。反面、世界的にはドバイとか上海とか、経済活動がブームという街を見ると、経済的リターンを目指すこと以外になにも考えてないという、も

Panel Discussion –Public Aesthetics

* Is people's consciousness changing?

Coordinator Masayuki MORIGUCHI: In the forum last year, Mr. Sasaki pointed out the signboard hung at the police outpost at the corner of Sukiyabashi crossing in Ginza as a typical example of things to be reduced. I heard that the signboard has disappeared recently. I feel that something is changing about making cityscapes better.

Toshio SASAKI: That's right. I also feel that people's norm consciousness is changing. It is worth giving voice to our opinions, because our voice may be able to attract sympathizers to push forward changes for the better.

George KURUMADO: When presenting architectural design proposals, we say to our clients, "this design will be favored by the public," by this an increasing portion of them have come to agree on our proposals. If the owners of buildings understand that their

desire for profit can only be achieved when it is linked with public benefit, cityscapes will become better.

MORIGUCHI: Mr. Tanaka sees that the government is not competent to appreciate design quality. But I feel that by collecting pictures from children, the government may intend to prevent citizens from expressing their opinions.

TANAKA: Because government officers do not have good aesthetic senses, this sort of phenomenon occurs. So, how to improve our cityscapes is a problem of management.

Humans are often selfish, and seeking their own profit. For example, if we suggest that all the facades be restored in a traditional structure preservation district, a few owners would say, "we do not have that much money, so I am going to demolish my house and open a parking lot." Then we would say, "if you refurbish your shop, this street will have higher value and more people will come to visit, and your shop will continue to prosper even in the days of your

左から、森口将之(コーディネータ)、
佐々木歳郎、車戸城二、田中一雄
韓亜由美



のすごいデザインが起こっているんです。

建築の投資というのは、あるまち固有のものと言えなくなっているところがあって、小林先生からもご指摘があったように、世界規模での認識が必要になっている領域だと思います。そういう意味で、私は今日のようなポイントで、建築主にはいつも「あなたの利益のためです」と言う。たとえば「あなたの建物の前の通りがよくなることは、あなたの土地の値段が上がるということなんです」と。そうすると納得されるんですね。この状況を進歩と呼んでいいのかというのはあります。ただ私は、自分の利益の希求がパブリックの利益の希求につながらないと、結局自分の利益にならないというメカニズムを理解していただければ、我々の社会はよくなっていく可能性を持っているのではないかと考えているのです。

森口:田中さんは、幼稚なデザインが氾濫している原因として、公の側にデザインを評価する能力がないんじゃないのかという意見ですが、言葉を出させずに絵を出させるというのは、余計な口を出させないという公の側の意識があるんじゃないかという感じもするんですが。

田中一雄:ああいう現象が問題だとあげ

つらうことが目的ではなく、なぜああいう現象が生まれるかということが問題なんです。行政側の美意識自体があるレベルに至っていないことが、ああいう結果に波及する。やはりどうやっていい方向に持っていかを考えないといけない。マネージメントの話になると思うんです。

人間というのは大変わがままで、いつでも自分の利益を考えるわけです。たとえば伝建地区(伝統的建造物群保存地区)で、「お店のファサードを復元して綺麗にしましょう」と言うのと、「うちは金がないから店を壊して駐車場にする」とおっしゃるわけです。そのときにどう説得するかと言うと、「いまお店を直しておくことで、まち全体の価値が上がって人が来るようになり、孫の代までお店が繁栄するんですよ」と言う。成功したまちは実際にそうですから。そう言うのと納得してくださるんです。もちろん価値とは何かを知らなくてはいけないけれど、その価値を市民を含めて作り続けていく仕組みを全体で共有する。それを考えていくことが課題じゃないかなと思うんです。

森口:韓さんのミラノの事例はものすごく印象的でしたが、最初に説明会をやったときに市民側は、選ばれた方しか参加

できなかったということなんです。

韓亜由美:いえ、日本と同じで、こういう計画がありますのでお集まりくださいという告知があったりチラシが配られたり、一通りの手続きは踏まれていたと思うんです。ただ日本でもそうですが、住民が無関心だった。だから行政側も、計画内容に無頓着になってしまったと思うんです。**森口:**最初に市民が積極的に関心を持てば、ああいうことにならなかったという気がするんですけど。

韓:施工前は集合住宅の間にある芝生の公園という何気ない風景でしたよね。きっかけがないと動かない。ああいう事件があったことで住民たちの意識が高まって、今後は自分たちで自分たちの住環境をなんとかしようという積極派に変わったのかもしれない。そういう意味ではよい機会だったのかもしれないと思うんです。

ひとつ説明し残したことがあります。日本の土木の分野でもよくある話なんです。建築家が最初に出したプランを、市の建設局が作りやすいように勝手に変更してしまったんです。たとえば当初の計画では、ベンチの隣に木が一本立っていたそうなんですが、その木を取ってしまった。そうすると、誰が責任者なのかわからな

grandchild." We show such owners successful cases, and usually they can be convinced. We should define what the value is, though, we should build up a mechanism to create the value of an area together with the citizens there. The task is how to create such a mechanism.

MORIGUCHI: Ms. Han presented an impressive example in Milan. Were only a limited number of citizens invited to attend the first meeting to hear the plan to be explained?

Ayumi HAN: No, the information on the meeting was given to all, like in Japan, by bulletin. But when citizens are indifferent, the local government becomes reluctant to draw people's attention. Before the reconstruction, the plaza was just an ordinary lawn park between apartment houses. But when the construction was completed, people realized that they didn't like it, and began to take action against it. One thing I forgot to report was that the city authority made partial changes on the original plan prepared by an

architect in order to make construction work easier. In the end, it was hard to identify who was responsible for the final design.

SASAKI: The city authority officers may say that they have taken a normal procedure by organizing a meeting and explaining the design, and that they implemented the plan as there was no opposition. Citizens, perhaps, might have considered that whatever procedures had been taken, they did not like what had been constructed. Then, they took action to demolish it. Here lies a great difference between Italian and Japanese people. We, the Japanese, may become quiet if the authority insists that it has taken due procedures.

* Design after reduction

MORIGUCHI: Ms. Han also said that urban redevelopment projects end up resembling each other. Do you think there are methods to present the uniqueness of a specific locality?

HAN: Citizens have a key role to reflect their affection for the place.

い。そういう公共事業にありがちな問題も絡んでいると思います。

森口: そのへんの話は佐々木さんが言った、日本橋の上の高架道路を撤去するというのと似たような感じがします。それはそれでいいと思うんですけど、日本人はどうしても目先の利益を追求し、長期のスパンでものを考えられないというところがある。それが看板の氾濫にもつながっていると思うんですが、長期的には利益になるということをはっきりさせるよい方策はあるでしょうか。

佐々木: その前に、先ほどのミラノの話聞いて思ったのは、日本人は良くも悪くも、どちらのサイドに立っていても、手続きをうまく利用しているんですよ。手続きをしたんだから文句を言わせないとかです。でも手続きって、実は中身がある話ではない。イタリア人らしいと思うのは、市の方は多分「公聴会も開いたし、その中でデザインも提案したけれど、みなさんは何も言わなかったの、通常の手続きで作りました」と言ったと思うんですが、住民は「そんなのは知ったこっちゃねえよ」と壊しちゃう。実はそこに本質が隠されているような気がします。日本人は小利口だから、その手続きに押されると自分も首が絞まっちゃうけど、向こうはもっと本質のところ、手続きがどうであろうとおかしいものはおかしいと。

今のご質問はそういう意識が広がらない限り、本当の意味での実質の話にはいれない。司馬遼太郎は非常に強い言葉で「これは都市の住民しか持ち得ないんだ

よ」とまで言っているんです。いろいろな人たちが集まりひとつのコミュニティを作るという本質があるからこそ、都市の住民はこういう感覚を持ちえるんだと。極端な言い方をすれば、こういう感覚を持ちえないやつは田舎者だよと言っている。そこを避けて通ったら、いつまでたっても「このまちは粋だね」という話にはならないわけです。

マイナスも大事、プラスも大事

森口: 韓さんから、再開発をするとみんな同じような外観になってしまうというお話がありました。よく見せるという意味では商業主義かなと思うんですけど。そういう状況の中でそのまちのオリジナリティを出す方法はないのでしょうか。

韓: 私は市民の意識がきっかけになるんじゃないかと考えているんです。車戸さんがおっしゃったみたいに、何か違うものを作って目を引いて短期的に利益を回収するやり方もありますが、もっと内容に則して個々の計画をみんなで丁寧に考えることが基本だと思うんですよ。日本全国どこに行こうがそっくりなので、この床面積でこの階高だったらこれっていう模範解答があるのかなとか思っています。郊外や地方の駅前の計画でも、2階のレベルで駅改札とつながり、巨大な歩道橋広場を渡って端から歩道に降りるというパターンはあつという間に全国に広がりましたよね。あれも元をたどると、どこかに成功例があつてお役人がそこを見学してという構図で。やっぱりそれは

悪循環だと思うんです。その場所・地域に対する考察だとか、場所と自分の関わりとかについて、市民は正面から考えるきっかけがない。それぞれの時代や立場でベターな解答は出していると思うんですが、それが現実の「場」と結びついていないという現状があると思います。

車戸: どこに行ってもそっくりな建物を設計している立場の人間としては非常につらいんですけど、模範解答があるんじゃないのかというご指摘はその通りです。情報が流れているんじゃないのかというのもその通りです。建てる時は類似例を全部当たって、それを凌駕しなければならぬという使命を負ってやりますから。似てくるというのはあると思います。

ただ弁解になっちゃうんですけど、設計する側としては、その土地とは別に時代にシンクロさせようとしているところはあります。時代にシンクロさせると、その時代に作るものは似てくる。ただ韓さんがおっしゃるように、もっと考えろというのは正しいですね。私たちは常に急がされて他の建物を見て、それを参考にちょっと手を加えるぐらいで済ませているところはあるので、いただいた設計料以上の仕事をしなきゃならないと常に思っています。許していただけますでしょうか。

田中: 金太郎館問題ですね。公共事業の場合は前例というのがあって、前例に従うのはとてもいいことなんですよ。問題が起きないということになりますから。景観というのは土地に根ざしたもので、その土地や人によって違うものって

Each plan should be more attentively prepared involving all concerned. Currently, station front designs are all alike. Local government officers visit places that are considered to be successful designs and follow that model.

KURUMADO: I admit that we seek models for our assigned projects. We conduct thorough research on similar projects and try to make a better one. We also try to make our products reflect popular trends. So, buildings from the same time may all resemble each other.

TANAKA: Government officers have a habit of following previous examples. For functional matters such as transportation systems, it is convenient to have commonality, but a landscape design should reflect the distinctive characteristics of each locality. In the past decade of economic recession in Japan, the government has spent too little money for design. In other words, it is a crisis for designers to be engaged in projects while considering to create valuable cityscapes.

SASAKI: Balancing diversity and unity is important. I am sure that

you will find an example of good balance in the hedges of Nerima city in Tokyo. The houses are rich in variety but because of the unity in the hedges, the streetscape here looks well coordinated. Strangely enough, houses seen from over the hedges look very charming and individual.

TANAKA: What is the fundamental principle of beauty? It is balance between common factors and changing factors. It is classic value to find beauty when changing factors are added to where common factors dominate. Designers should consider this value as their basic principle. Post modern design stresses diversity and changing factors, which may result in chaos. That would not be favorable for public designs.

MORIGUCHI: Public design should emphasize unity.
TANAKA: Yes. Unity should be the basic principle. However, the term "unity" is not favored. People say that they don't like their rights to be restricted, or that the government is going to prevent them from making profit. But it is important for the government to push

絶対にあるはずなんです。これは基本だと思えます。ただ機能的なこと、たとえば交通機関などは、ある程度の共通性を持った方が利便性が高いと思えます。

ちょっと提案させていただいていいですか。このフォーラムはマイナスのデザインということでやっているんですが、特に韓さんがおやりになっていることはプラスのデザインもあるわけですよ。何をマイナスするかは議論が尽きた話だと思えますし、プラスをしていくことを行政あるいは景観の中で考えないといけないんじゃないか。これは日本の課題だと思えます。というのは、空白の10年と言われた中において、モノを作らない金を使わないことが行き過ぎているわけです。とくに行政において、デザインをすることが無駄なことという意識があって、なるべくおとなしくやる。そうすると景観賞などの賞をとるのはほとんど伝建地区のようなところ。ある意味逆金太郎飴状態で、新しい都市に新しいモノを作りにくくなっている。これはデザイナーの危機だと思えます。

何度もフランスを例に出してしましますが、彼らは守りながら作るということをやっている。もちろんマイナスは大事ですが、プラスのデザインとして、いかに価値のあるものを作っていくかということを考えていかないと、日本は取り残されちゃうんじゃないか、というのが私の杞憂です。パブリックデザインマネジメントと言うのであれば、プラスのデザインの価値も考えていく必要がある。

佐々木:今のご提案は、多様性と統一性のバランスをどうとるかという話だと思えます。そういう意味で、バランスを実感していただけるのは、最初にお見せした練馬区向山三丁目の生け垣なんです。生け垣に隠れていますが個々の住宅は非常にバリエーションに富んでいます。これを生け垣ではなく、普通のブロック塀に置き換えたとしても、非常に雑多なまちになるんです。ところが生け垣の統一感があると、生け垣を超えて見える家々は個性的に見えてしまう。この不思議さがあるんです。ここに統一感と多様性の落としどころが隠れている気がします。

田中:大学の講義で美の根本原理とは何かと学生に最後に言うんですが、多様性の中の秩序、統一の中の変化というものは、共通事項と変化要因のバランスなんですよ。共通要因がドミナントとして存在し、そのうえに変化要因が入ることによって美しいと思うのが原点的な価値観です。デザインとしてはそれを基本として押さえるべきだと思うんです。ポストモダンの中でいうと、多様性や変化要因に重点を置いているわけです。そうすると結果的にはカオスになっていくということがあって、それはパブリックには馴染まないんじゃないか。という点で小林先生のお話に大変共感しました。

森口:どっちに軸足を置くかという、まず統一をしていこうと。

田中:そうですね。統一を基本におこなきゃいけないんですけど、統一と言うと嫌われるんです。規制や私権の抑制をする

とか、金儲けを阻害する気かという話になるわけです。でもそこをやらないとよくならない。それはなぜか！行政の腰が抜けているからですね。だんだん問題発言になってきました。

森口:もうひとつ「私」、つまり市民のほうですが、会場に来ている方々はデザイン関係に従事されている方が多いと思うんです。で、デザイナーの立場から市民に向けて、デザインのプロセスを考えてくれというメッセージを出すのに、いい方法はありますか。

車戸:それはやはり優れたデザインの提案に尽きると思います。我々はそれを目的としてやっているつもりです。

森口:委員会ではデザイナーの名前を出したほうが美に対する注目が集まり、目が養われるかもしれないという話も出ましたが、その方向に持っていったほうがいいと思えますか。

韓:私は公共の仕事が多いんですが、はっきり言ってデザイナーの仕事の評価する基準はありません。コンクリート何立米とか鉄何トンと同じレベルで話をしないといけない。景観とか美しい国とかを言うのなら、まず職能としてのデザイナーを、国のレベルで認めるべきではないかと。この時代、デザインに対して市民の目はたいへん肥えています。にもかかわらず、「景観」をうたう国や行政の中での器さえ用意されていないという、驚くべき現実があります。結果、仕事以前にすごく苦労します。

森口:問題は市民よりも行政にありそう

forward unity in design.

MORIGUCHI: Do you have any good methods in mind to invite citizens to consider design process?

KURUMADO: First of all, we must propose excellent design plans. There's no other way.

MORIGUCHI: In our Committee, some are in favor of announcing the name of the designer involved in each project in order to draw public attention to design, and to cultivate people's eye to design. What do you think?

HAN: I work mainly for public projects. I can say that there is no criterion to evaluate the work of designers. If the government is truly concerned about landscapes or the beauty of the country, they should establish a formal system of qualification and authorization of designers should be authorized. People have a discerning eye. But government officers are not positive to allocate budgets to design. They are afraid of complaints from citizens about wasting

taxpayers' funds. They are afraid because they have never been praised for what they have done. For example, the Ministry of Land, Infrastructure and Transport is conducting "voting" for unfavorable things about road administration. But there is no "voting" for favorable things. They should learn that citizens are pleased when government officers do something good for the public.

From the floor

Floor: I am a civil engineer. I would like to ask Ms. Han about the park in Milan. It would hardly happen in Japan to divide a park into two parts, one dry and the other to be wet parts. We need environmental assessment, and explanation to neighbors. Then, people would say that they want to keep the existing greenery and that they don't see necessity for change. So, I wonder why such a thing happened in Milan, maybe, the designer was a powerful person.

To Mr. Tanaka, I would like to ask what is wrong with designs drawn

ですか。

韓: 行政の人たちは何を恐れているかという、税金の無駄遣いをしていると言われはしないかと。だから景観にお金を拠出することに関して、内容の問題ではなく、そのことを恐れている。彼らは褒められたことがないんですね。いい結果を出したときは、ここがよかった、と積極的に褒めたほうがいいと思います。たとえば国土交通省の道路行政で言うと、最近、不人気投票というのをやっているんです。ところが人気投票がない。アンバランスですね。景観でも、きちんとやったら市民も大歓迎なんだよということを、どこかで実践しないといけないと思うんです。

会場から

生き抜くためのデザイン投資

会場: 私はデザイナーじゃなくて土木屋です。まず韓さんにお伺いしたいんですが、ミラノの事例ですが、公園を真っ二つに割ってひとつをドライにしてひとつをグリーンにすることが、そんなに簡単に日本の国でできるとは思えないんです。環境アセスメントをまず要求されるでしょうし。住民に模型やスライドなどを作って説明すると、今のような計画は通らないと思います。せっかくいい緑があるのにこんなことをするのかという話になる。逆にイタリアでなぜそんなことができたのかが不思議ですね。よほど建築家が偉かったとしか思えません。

それから田中さんにもお伺いしたいんですが、子どもにデザインをさせて大した金も払わないでやらせたというのは問題だと思います。ただ、あのデザインのどこが悪いのか？ということが、今日の主旨からすると一番の問題だろうと思うんです。それをお伺いしたい。

車戸さんに、投資のための都市というのも結構だと思うんですが、すべてのまちがそうなのかと。私は都市屋でもありますが、港区あたりは、日本の都市なのに、アメリカ人にもヒットするようなまちにしないと衰退するというので、この10年間ぐらいやってきたんです。かといって、これからはドバイなんかには負けちゃいけないから、金融関係の方が日本にも住み心地のよいまちを茅場町あたりに作ろうじゃないかとやっているんです。それが投資のまちというなら、そうだろうと思います。だけど佐々木さんが紹介した練馬区のまちづくりは、住宅の価値も上がるでしょうが、投資のためのまちづくりという概念では括れないんじゃないかなと思うんですけど、いかがですか。

韓: ご指摘の通り、ミラノの例はひとつに建築家の位置づけの高さ、というのがあります。多分その建築家は何らかのコンセプトも立てて模型も作って見せたと思います。ただイタリアでは一般的に建築家は技術者というより歴史や思想に通じた芸術家として認識されていて容易には口出しできない。でも実際は土地の文脈を読んでいないという責任は建築家にあると思いますし、行政はそれを鵜呑みに

し、しかも一方で著作物に容易に改変も加えるなど、もの作りのプロセスとして一貫性を欠いたことにも問題があると思います。ただ、さきほど佐々木さんからお話があったように、そのへんはイタリア人的で、ダメなものダメだと。手続きがどうじゃなくて、声を上げるというところに民主主義が生きてるなと思います。イタリア人にとって広場はまさに市民自身のための場であるし。

会場: イタリア人のほうがそういう意味ではいい加減なんで、それは民主主義とは言わないんじゃないですか。

韓: でも日本には、作ってみたら全然よくありませんでしたというのがありますよね。人が集まっていない公園とか、危なくてしょうがない公園とか。そういうものを我慢していたり、無関心を装ったりして、鈍感だというところは市民にも問題はあると思います。

田中: 韓さんの話に若干加えると、行政が説明責任を最初に果たしていなかった結果じゃないかなとは思いますが。

で、純真無垢な中学生の絵をこきおろした悪いおじさんでございませうけども。あの絵が悪いと言っているのではなくて、やり方がおかしいと言っているんです。大人より中学生のほうが夢があるので、いろいろなことを描いてくれるんですけど、景観というのは関係の中で考えることです。あの場所を虹の七色にしているのかということ、中学生は思わないですね。100年の計という単位で考える土木施設を決めるプロセスを、そいう

by children.

To Mr. Kurumado, A city that can attract investment is a good idea. Minato city in Tokyo has been redeveloping old districts to keep these districts viable as business centers. However, the housing district in Nerima city cannot be considered as an example of urban development aimed to attract investment even though the value of its neighborhood and houses might be heightened. What do you think about this?

HAN: As you said, the architect of the park in Milan should be blamed for his failure to understand the surrounding context. What is worse is that the city office not only approved the architect's proposal but also made changes to the design to make construction easier. However, the citizens there said "No" to the new park after the construction was completed. Here I find that democracy is in place.

Floor: I doubt that that is democracy. People there are just irresponsible.

HAN: In Japan, there are many public facilities which have proven unpopular after they were completed, such as parks with few users and parks with possible danger of the occurrence of crimes. But Japanese people usually keep quiet, at least publicly, or pretend to be indifferent. TANAKA: I am not saying that children's paintings are not good, but I am opposed to the way the city government had taken. Children draw pictures full of their dreams. But a cityscape must be designed in relation with the environment. Is it right to paint a railway facility in seven rainbow colors? It is a problem to decide the design of a public engineering work which has a long life with a children's painting.

KURUMADO: My point is not the need for urban development to attract investment. As population is declining in Japan, people will become choosy about the places they want to live in. Some towns may be depopulated and become like ghost towns, because people don't like to live there. When I say that no investment may be made unless a town is attractive enough, I mean that a town without

った子どもさんの絵で決めることが問題だということを申し上げたつもりです。

車戸:建築は歴史の中で洗練の過程を踏まえていますので、そういう建物をいっぱい見た人間の立場から言うと、ちょっとやりすぎという田中さんのご意見に共感します。

私は投資のためのまちが社会の現象面で起こってしまうことはもちろん否定しませんが、私のポイントは投資のためのまちではないんですね。これから人口減の社会に我々は直面します。ということはどうしてもまちの選別が起こります。このまちには住みたくないという人たちは、そのまちに住まなくなって、ゴーストタウン化するんだという話です。魅力がないと投資が起これないというのは、まちとして生き抜けない可能性がある。そういう意味合いで申し上げたつもりです。

迫田(会場):日本橋の上の高架道路を取ると新聞の記事で読んだのですが、完成予想図を見ると、どこかで見たような水辺の風景になっていました。高架道路を取る話に反対ではないんですけど、その後こうなるよという絵に魅力を感じなかったの、何かコメントをいただければありがたいのですが。

田中:あれ自体はソウルの清溪川(チョンゲチョン)の影響ですが、マイナスのデザインとしては高架道路を取るという価値が最大であって、その後先ほど申し上げたようなプラスのデザイン、新しく作り出す部分において、日本の景観デザインとして深い考慮が欠けているということ



マイナスの委員会座長 小林治人JD理事

じゃないでしょうか。

車戸:韓さんがご指摘のように、デザイナーのコミッションを人工(にんく)として考えているうちは、ああいう現象が起これると思います。田中さんも韓さんもご指摘のように、クオリティをどこかで誰かが責任をもって決めていくことが重要で、多分今のご批判も、誰かが責任を持って決めてデザインをしたものなら、批判を受けて「まずい」とか「これでいいんだ」という議論が出て、次のステップへいけるはずだと思います。

田中:もうひとつ、なぜそのプラスができないかということ、プラスのデザインをきちっと考慮するフィーを払っていないのかもしれないですね。コンサルティング関係の方はわかると思いますが、不当に安い値段で働かされている状況なんです。私も「なんでお前の人工は潜水夫より高いんだ」と言われたことがあります。知的ノウハウなんてあったものじゃないんですけど、これが悲しい日本の状況です。

森口:ここでマイナスのデザイン委員会座長の小林治人さんに、まとめの言葉をいただきたいと思います。

小林治人:マイナスのデザインというテ



千葉大学大学院 小林正弥教授

ーマを始めてもう5年くらいになります。最初は東京の生活空間の中で、目が腐るような看板や鼓膜が破れそうな呼び込み、そういうものをマイナスしなければならぬということでスタートしました。そのうち関心を持っていただく方に委員としてお集りいただいて議論を重ねてきました。

今日のフォーラムの前に日本デザイン機構(JD)の総会がありました。そこで、ものを言うJDとして世界に向けてもう少し日本の顔を出していこうじゃないかという議論がありました。このことを踏まえて次のステップを考えていきたいと思います。

今日は小林先生に「公共性とその美学」ということで、我々が整理しきれなかったことを論理的にお話しいただいて、大変に分かりやすくありがたかったと思います。小林先生に皆さんの意見の感想を聞かせていただいて、まとめに代えさせていただければと思います。

小林正弥:私もいろいろな議論をしてきましたが、こういう主題について聞くのは初めてですのでいろいろ勉強になりました。何点か公共哲学との関係でお話し

charm will not survive as a town.

Floor (SAKODA): I read a newspaper article about the removal of the express highway above Nihombashi Bridge. But the conceptional drawing at its completion showed a mediocre waterside scene that I have seen somewhere before.

TANAKA: The most important part of the plan is to remove the highway, and I am afraid that no serious consideration has been paid as yet to landscape design after removing it.

KURUMADO: Someone should take full responsibility for the quality of design, and invite the public for comments, so that open discussions occur to proceed to the next stage.

TANAKA: Another factor for the mediocre design might be that the fee paid was surprisingly low. People do not like to pay for intellectual expertise or creativity, and design fees are too low.

MORIGUCHI: Mr. Kobayashi, could you give your comment as the Chairperson of the Minus Design Committee?

Haruto KOBAYASHI: For the past five years, we have been discussing the theme of the overflow of poor designs spoiling cityscapes.

Today, we had the general assembly of the Japan Institute of Design (JD) right before this forum. We discussed our need for speaking out, expressing the voices of Japan to the world. I would like to consider steps to realize this.

I would like to invite Prof. Kobayashi to give his comments on the forum.

Masaya KOBAYASHI: I am glad to listen to enlightening speeches. I would like to say a few words in relation to public philosophy. Mr. Sasaki emphasized public spirit. His view is agreeable to me as I think public aesthetic sense will develop only when individuals have public spirit. In relation to Mr. Kurumado's speech, I gather thinkers have struggled to overcome the conflict between profit and

たいと思います。

まず佐々木さんから「公共精神」と言っ
ていただいて嬉しく思います。公共哲学
にいろんなバリエーションがあって、「公
共精神を重視するかしないか、またどの
ような公共精神を考えるか」というと
ころには議論がありますが、私はやはり公
共精神は非常に大事だと思っているので
す。「市民一人ひとりの公共精神が育た
ないと、美的な感覚も公共的に育たない
」と
思いますので、公共精神を強調して
いただいたのはありがたかった、と思
います。それから車戸さんのお話に関
しては、思想史に「理念と利益の問題」
というのはずとあって、「それにどうい
うポジションを取るか」ということが
思想家の特色となっています。儒教
では、「義と利」の関係の問題です。
理想としては理念と利益が一致する
ことが望ましいのですが、実際は一致
しないことがあるので、それをどう
克服するか。そこが非常に大きな課
題です。いろいろ議論を聞いて参考
になりました。私としては、可能な限
り双方の一致を求めつつ、不可能で
かつ重要なところは理念を優先する
という考え方をしています。

韓さんの話は、私が研究しているデ
モクラシー論そのものに関連してい
ますからいろいろ考えるところがあ
りました。途中から声を出して行政
に変更を迫ることも、あってしかる
べきだと思いますが、もともと「初
めの段階で声が出ない」ということ
がまず問題です。それは行政の問題
も当然あると思うし、人々の問題

意識の問題でもあると思います。後で
言うことももちろん大事だけれど、初
めのところでどうやって声を出すか。
このところで意識を高めるのがまず
大事なポイントかな、と思います。

田中さんの言われた、クオリティや
成熟の問題も非常に共感しました。実
は日本の文化の中では、成熟というこ
とがあまり評価されないのです。た
とえば、「若い人のほうがいい」とか
、「子どものほうがいい」という考え
方はすごく大きいのです。それに対
して、美徳という観点から見れば、
もちろん若い人の素直な心の中に
素晴らしいものもあるけれども、訓
練やキャリアを積んできた人の見識
とか教養も評価する見方がないと、
見方が歪んでしまいます。その部分
を日本が失って久しい。日本の場合
、儒教的カルチャーがもともとあ
ったわけですから、以前はそれを
評価していたのですけれど、戦後
に薄れてしまったのです。この見
方を復興していくのは非常に重要
であって、ある意味で「クオリティ
の問題は公共哲学の一番の核心の
問題だ」と私は思っています。でも
評価されるべきだ、と思っています。

森口:これにてディスカッションは
終了とさせていただきます。どうも
ありがとうございました。

もりぐち・まさゆき／自動車ジャーナ
リスト。1962年東京都生まれ。1984
年早稲田大学教育学部卒業(数学専攻)
。徳間書店、ネコ・パブリッシングな
どの出版社編集部を経て、1993年
にフリーランスの自動車ジャーナリス
トとして独立、現在に至る。雑誌、
インターネット、ラジオなど各種メ
ディアで活動中。日本自動車ジャー
ナリスト連盟、日仏メディア交流協
会、日本デザイン機構、各会員。日
本カー・オブ・ザ・イヤー選考委員。

編集後記

今回のフォーラムにおける白眉は、
小林正弥先生の講演だったと感じて
います。我々マイナスのデザイン委員
会が手探り状態で議論していたテー
マを、公共哲学という見地から体系
的、論理的に解説していただき、大
変参考になりました。

翻って我々の発表や議論は、各自
が専門の範囲内で主張を述べたに
すぎず、コーディネータの役不足
もあり、JDとしての統一メッセ
ージを導き出せずに終わるという
、消化不足の内容になりました。

おりしも、某漫画家が建設中の自
宅を紅白の横縞で彩ることが発覚
し、周辺住民が建築差し止めの仮
処分申請を起こしました。この一
件を見てもわかるように、現在の
日本は景観に追い風が吹いています。

フォーラムに先立って開催された
総会では、「ものを言うJD」とい
う提言が出されたと聞きます。我
々も公共の美学とはいかなるもの
かを具体例を使い発信していこう
という結論に達し、準備を始めた
ところです。(森口将之)

VOICE OF DESIGN VOL. 13-1

2007年9月20日発行

発行人／栄久庵憲司

編集委員／迫田幸雄(委員長)、鳥越けい子、

薄井滋、森口将之

南條あゆみ(事務局)

翻訳／林 千根

発行所／日本デザイン機構事務局 〒171-0033

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F

印刷所／株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.13-1

Issued: September. 20. 2007

Published by Japan Institute of Design

3-30-14 Takada, Toshima-ku, Tokyo 171-0033 Japan

Phone: 81-3-5958-2155 Fax: 81-3-5958-2156

Publisher: Kenji EKUAN

Chief Editor: Yukio SAKODA / Translator: Chine HAYASHI

Printed by Takayama inc.

concepts throughout history. We can hardly expect to give shape to a concept and at the same time to obtain profit out of the product. It is a challenge for designers to solve this difficult question. Ms. Han's case about a park in Milan made me think about democracy. A problem lies in that citizens did not voice their views in the planning process. It is a question of how to raise their consciousness before construction is executed. Mr. Tanaka's presentation on the quality and maturity of design for public facilities was interesting. In contemporary Japanese culture, maturity is not appreciated. Youthfulness, of course, is admired, but the views and intelligence of matured persons should also be appreciated, as we used to evaluate them highly in the past. It is important to restore the appreciation of maturity in thought and art. I consider that quality is the core of public philosophy, therefore, it is important as a concept as well as evaluating profit.

Editor's Note

The best part of this forum was the keynote lecture by Prof. Masaya Kobayashi. He gave us a clear, logical and systematic explanation using the term of public philosophy as it relates to the subject that we have been discussing and trying to clarify.

I learned that the JD general assembly resolved to express our opinions outside the organization. We are going to advocate public aesthetics showing concrete examples. We have just begun preparing for it. (Masayuki Moriguchi)